200本以上のライヴを年間行う、おおはた雄一。最近はライヴハウスでもステージではない場所で歌ってみたり、窓から見える夜景を見てその場で曲を作ってみるなど、リラックスしている。N.Y.で制作した最新アルバムの影響もあるのだろうか。アルバムは、来日公演のオープニングアクトとして昨今共演が続いたジェシー・ハリスとリチャード・ジュリアン（ともにノラ・ジョーンズの仲間）をプロデューサーに迎えた。

「みんながピザを食べている前で僕がギター一本で曲を披露して、〝じゃ、こんな感じでやる？〟って、軽く約束事を決めて、そのまま1発か多くて3発でレコーディング。しかも録音している感覚がなくて、マウロ（パー

音楽が、単なる空気の振動を超える地点がある。8ottoの最新作『HYPER,HYP8R,HYPER』は、心をつかむ曲調とグルーヴでその地点を一瞬で超えるばかりか、そこから見えてくる光景が本当に多種多様なのがいい。

「今はアイデア的にはカラッポになったので、ここからいろんなものを見たり、いろんな人と話したりして、アイデアを探す感じですね。このアルバムで全部出し切れましたから」（マエノソノマサキ：Vo&Ds）

そんな言葉どおり、この3rdアルバムは彼らが音楽をどうとらえているか、どういう方法論と実験でそれを放出しようとしているのかまでも、まっすぐ伝える作品だ。踊れるロックサウ

■THE VINES
ザ・ヴァインズ

写真／三島タカユキ　文／麦倉正樹[BTR]

「ロックミュージックを
鳴らすことに意味なんてないんだ」
2年ぶり4枚目のアルバム『メロディア』で
完全復活を果たしたザ・ヴァインズの現在。

PROFILE

写真左より、ヘイミッシュ・ロッサー(Dr)、ブラッド・ヒールド(B)、クレイグ・ニコルズ(Vo&G)、ライアン・グリフィス(G)。95年、オーストラリアのシドニーで結成。1stAL『ハイリー・イヴォルヴド』(02年)が世界中で高い評価を受ける。その後、クレイグの精神状態の悪化により活動規模を縮小するも、4thAL『メロディア』(日本では9月24日にリリース予定)で完全復活を宣言。この夏のフジロックでは、4年ぶり2度目となる来日も果たした。

ナイーブな感性と荒々しい衝動が混在するザ・ヴァインズのロックミュージックが帰ってきた！　約2年ぶり通算4枚目となるアルバム『メロディア』は、ヴァインズ完全復活を告げる一枚である。ロックの初期衝動に立ち返ったような激しさと美しきサイケデリア。大ブレイクの反動から、ときにはダークサイドに陥ることもあったヴォーカル、クレイグに、まずは本作を作るうえでイメージしたことを尋ねてみた。

「僕の頭の中なんて、きっと誰も知りたくないと思うよ。かなり暗くて混沌としているからね（笑）。でも、そこからなるべくよいものを取り出していきたいっていうのはいつも思っていて……それは今回も一緒だった。もちろん、曲ごとにスタイルは違うけど、アレンジやハーモニーまでそのすべてを含めて〝グッド・アート〟と呼べるものを僕たちは作りたかったんだ」

1曲目の〝ゲット・アウト〟から、畳みかけるように繰り出される激しくも美しいロックチューンの数々。それはかつて〝ビートルズ・ミーツ・ニルヴァーナ〟と称された初期の彼らのテイストに近いように思う。端的にいうならば、ヴァインズ原点回帰ともいえるフレッシュなサウンド。その意識は、本人たちにもあったのだろうか？

「うん、1枚目に近い感じのものを作りたかったんだ。やっぱり、2枚目、3枚目っていうのは、かなりクレイジーな時期に作ったアルバムだったから――ファーストでいきなり大ブレイクした後は、朝からビールを飲んで毎日セレブのやつらと会って、みたいな生活をしていて……っていうのは冗談だけど（笑）。でも、当時のことを考えると、今こうしていられるのが、ちょっとわからなくなるんだ。だから、サードの延長みたいなものを作るのは正直つらかった。そうじゃなくて、ここからまた再スタートできるような、そういうアルバムを作りたかったんだよ」

本作のリード曲となった〝ビーズ・ア・ロッカー〟という曲の中にこんなフレーズがある。《かつて誰にも理解されない若者がいた／奴がしたことはロックンロール・ミュージックだけ／奴がずっと探していたのは、それをやることの意味だった》

ともすれば、世界的なブレイク以降、自らの音楽を探し求め苦悩していた彼自身の姿を歌ったようにも思えるこの曲だが、クレイグ自身にとって、ロックをやることの〝意味〟は、果たして見つかったのだろうか？

「うーん……やっぱり、ロックミュージックを鳴らすことに意味なんてないっていうのが僕の答えかな？　だって、アーティストやバンドっていうのは、別に誰かに言われて何かをやってるわけじゃなくて、むしろやるなって言われてるのにやってる場合が多いわけだよね（笑）。でも、それでいいんだっていうことに気づいたんだ」

期待やプレッシャーに押し潰されることなく、内面から湧き出る衝動を、自らの思うがまま自由に鳴らすこと。本作の驚くべきフレッシュさの理由は、そこにあるのかもしれない。

「確かにそうかもしれないね。これは誰かに言われて作ったアルバムじゃないし、むしろテレビなんかを見ながら、気の向くままに曲を作っていったらこういうアルバムになったわけで……だから、いってみれば、すごくレイジーな作り方をしたアルバムなのかもしれない。でも、それが逆にバンドによい効果をもたらせた気はするよね。ファーストのときは、実際そういう作り方をしていたような気がするし、よく考えたら僕自身は、ティーンのころから何にも変わっちゃいないわけだから。昔よりもちょっとだけ長い話や難しい言葉が話せるようになったくらいなものでさ（笑）」

『Melodia』
(BMG JAPAN)